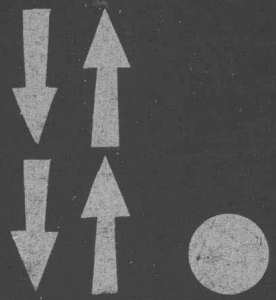
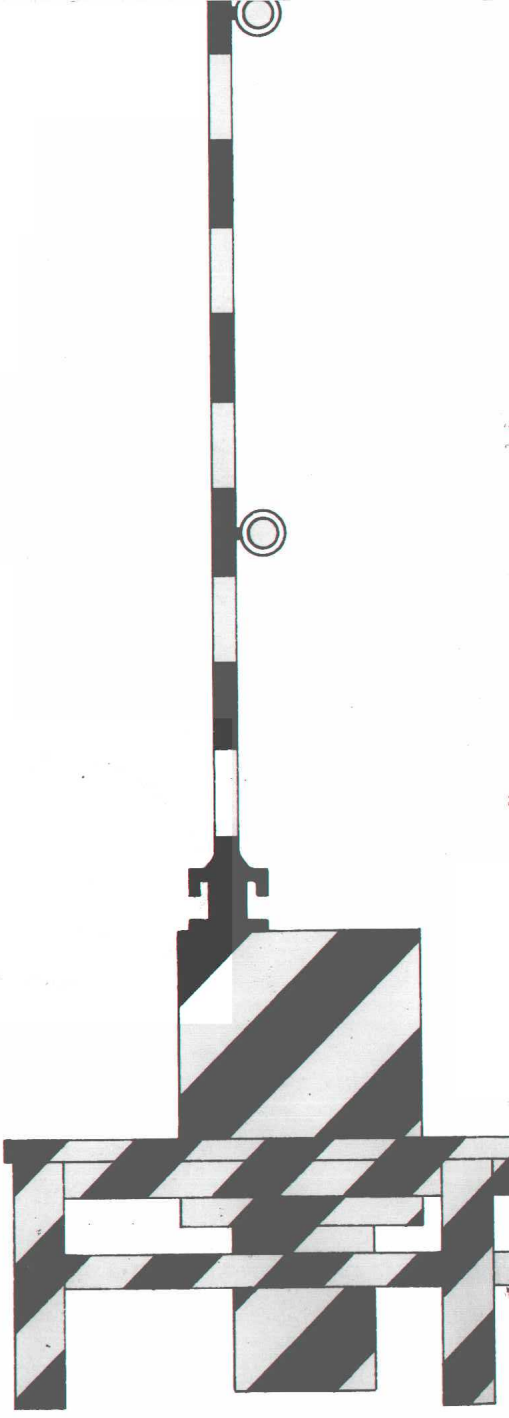


世相斜断記

飯沢匡



潮出版社

飯沢　匡（いいざわただす）　劇作家。1909年生れ。1954年第1回岸田演劇賞，1958年NHK放送文化賞，1968年読売文学賞，1971年小野宮吉戯曲平和賞等を受賞。著書『飯沢匡狂言集』（未来社）『飯沢匡喜劇集』（未来社）『佐渡狐』（平凡社）『反骨の絵師　歌川国芳』（筑摩書房）等。

世相斜断記

昭和49年9月20日　印刷
昭和49年9月25日　発行

著者　飯沢　匡
発行者　島津矩久

発行所　東京都新宿区南元町14—1
株式会社　潮出版社
電話（357）7111（代）振替東京69090
〒160

印刷　中央精版印刷　　製本　鈴木製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

© T. Iizawa 1974 Printed in Japan

世相斜断記・目次

I

インドについて思う　11
インド人と食生活　25
カシミールの旅　31
一つの城　38
やぶにらみフランス紀行　43
バーミアンの磨崖仏の前で　52
廃墟の町をめぐる岩山の間の道——禁欲生活を送るイスラム教下の若者たち　66
バリ島／ディスカバー・ニッポン紀行　72
東欧の国々——ポーランド、ユーゴスラビア　89
人生島・小笠原　96
秘史を求めて奥吉野へ　104

II

世界一「自由」の日本人　115
「学ぶ」日本人　122
日本料理の迷信と真実　124
本気論　128

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

無神経と有神経　131
自発的なものを待つ　135
風俗の平均化の原因　140
〝脱俗〟の誘惑　144
男が女を語るとき　147
接吻考　151
直訳的文化　153
軟派の弁　156
清潔の民　158
祭りと大衆の暴力化　161
革命成就後　165
二月十一日という日――社会の目　168
宣伝は量より質　171
スポーツ・アニマルの悲しさ　174
社長室の絵――不調和な美術の氾濫　176
水について　178
古墓発掘と革命　181
たるんでるスポーツマン――オリンピック・テロに寄せて　183
外貨の使い道――芸術交流を急げ　185

パンダ・ブーム　188
予言、占いの流行　190
出稼ぎの裏　192
平静な国民に見合った報道――アン王女誘拐事件に際会して
サルの原則が人間にも――コインロッカーの赤ん坊　197
スプーン曲げと文化人――皇国不敗論を顧みよ　199
私の近所づきあい　202
バラと私　205

III

偉人も悪人も母から生まれる　211
母性愛　217
かわいい子には旅をさせよ　220
母親にほしい鋭い目　223
率直さこそおとな　226
小言幸兵衛的若者論　229
幻想家　236
原理人間の悲劇――連合赤軍に思う　240

氏より育ち　243
親の無知と子供の反抗　248

IV

気にする風習はどこから　255
「心」を抜いた葬式――冠婚葬祭主義の本質　265
結婚式否定論者の実際　268
パーティ否定論　273
日本の正月に想うこと　277
エチケットは我流で　280
うぐいすとスキーに思うこと　281

V

ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』――一冊の本　287
「北守将軍」の驚き　288
冨山房刊・模範家庭文庫　292
笑いの源泉・狂言の強味――わたしと古典　294
お伽噺の心　295

変な連想――熊楠と足穂　302
井上ひさし氏の作品　306
演劇的に見た筒井康隆作品　309
城さんを仲介者として――瀬戸内晴美　313
林達夫邸訪問　316
伝統と科学性――吉沢章　321
椛島さんの画風　322
画について――白土三平　324
文身日本一の大和田光明　328
画家・泰三氏の憂鬱　334
前駆的な芸術家――武井武雄　336
類いまれな詩美の世界――『六浦光雄作品集』　337
杉村春子さんの来た道　339
サラと輝子　342
江守徹君の横顔　345
草人の連想――金内喜久夫　347
獅子文六の金銭欲――ケチと人はいうけれど　349
『画家への志望』――私の処女作　358
『芝居――見る・作る』――わが著書を語る　359

異郷にある本　360
あとがき　363

装幀　山藤章二

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

I

インドについて思う

インドは、大東亜戦争で日本が盛んに米・英と戦ったのがもとで独立できたんだというので、非常に日本という国に対して良い感じを持っている。何と言ってもアジアの一番の兄貴だと思っているわけだ。「日本は金持ちではないか」と何回も言われ、そのたびに弱ったが、確かに日本はインドから比べれば金持ちである。

私がインドに行く時、一番恐れたのは、はたして食物があるかということだった。新聞を読んでいると五千万人の人が飢えているといい、グラフ雑誌を見ると骨と皮みたいなお婆さんの写真なんかが出ていた。「パンを持って行かなくてもよいか」とインド大使館の人に言ったら、ゲラゲラ笑い出して「それほどインドは困っていません」と言った。

しかし、インドという国は、そういう意味では貧しい国である。私は人一倍食いしん坊で、食べ物に非常に関心がある。「インドでおいしいものがありましたか」と聞かれると、ちょっと思いだせないくらい旨いもののない所だ。インドはカレーライスの国だというが、そのカレーライスだって悲しいもんである。これは悪口ではなくて本当のことなので仕様がない。

ニューデリー滞在中の費用は、すべてインド政府がもってくれて、毎晩パーティーがあった。文部大臣の招宴とか、プリンセス何とか何とか何とかという長い名前の殿下というような人の招待状は金の縁取りがしてある仰々しいやつが来るわけだ。だから今日は殿下が御馳走をしてくれるのだから少しは何か出ると思って出かけて行くと、いつも同じで、芝生の上に白いテーブルが

あり、そこにお皿が並んでいるわけで、大体が禁酒国であるから、カクテルはほとんど出ない。清涼飲料など飲んでいるうちに「あちらに食事の用意ができてます」と言うので行ってみると、多勢の人がひしめき合っている。やっとテーブルにたどりつくと、お菓子みたいなものを固めたようなものが残っているだけで、後は全然ない。つまり早い人が食べてしまったのだ。

あきらめて、ホテルに帰って食べようと思っていると「あなたはさっきから何にも食べていらっしゃらないからお食べにならなくちゃ」と言って女の人が――インドの女の人は非常に綺麗だ。色は黒いが、目が大きくて非常に上品な顔をしていて、綺麗な英語を話すし立派なものだ。そういう人が「日本風の遠慮はこのさい禁物ですよ」とか、いろいろ親切なことを言って、お皿を持って来てくれるのだが、これを食べようとしても、とうてい喉を通らない。なぜかと言うと、ものすごく甘い。「私はお菓子は食べない」と言っても「これはお菓子ではない。これは食事である」と言うのだ。「われわれの観念にはデザートなどない。これは食事の一つである」と言うのだ。どうやら飢えている人たちがワァーと来て、おいしい肉らしいものは食べてしまうらしい。われわれみたいに後から行った者には肉などなくなって、甘い食物だけが残っているわけだ。すべてがそんな具合で、ホテルの卵でも、これが又すごく小さい。鶏までやせているのだ。

ボンベイで腕輪を買った。それがはじめから輪の腕輪で金具で取りはずしのできないものである。これがどう見ても子供みたいなサイズなので不審に思って聞いたら「これは大人のです」と言う。これではと言って一番大きなものを買って来たのだが、さて日本へ帰って来て、女性たちに「インドからのお土産をあげよう」と言って配ったのはよかったが、誰の手にもはいらない。つまりそれほどインドの女性の手は細く骨と皮なのである。プリンセス何とか何とかという人のパーティーに来る女性は大体肥ってグラマーだけれど、一般の女性はやせている。貧富の差が非

常にはなはだしいわけだ。

皆さんがインド人という観念で御覧になる、日本へ来ているような人は上流の人で、それから映画なんかに出てくるインド人は非常に綺麗な人が出てくるが、これはみな上流の人なのであろう。だから非常に栄養が良いように思えるが、一度インドへ行ってインドの一般的な人、文部省の役人とか何とかしている人でも、本当にやせていて栄養が良くない。私はやはり文部省に属している演芸学校の研究員で日本に来たことがあるという人の家に行った。そこの中流以上の家庭だろう、一応コンクリートのアパートみたいな所に住んでいる。その人に聞いたら水は朝と夜しか出ない、昼間は全然出ないのだと言う。われわれがちょうど戦後経験したような苦しい生活を今インドの人たちはしていると言えると思う。

ずるい英国の統治政策

これはどういうことかと言えば、インドは永い間、四百年近くも英国に統治されてきた。英国という国はなかなかずるいから、直接は手を下さないで、いろいろ各州に殿様がいたわけだ。この殿様に統治は任せて、殿様たちを監督することによって、間接的にインドを統治した。あまり教育とか何とかということをしなかったわけだ。日本は朝鮮や台湾をかつて領有していたことがあるが、日本のやり方というのは、すばらしい学校を作った。朝鮮より台湾の方がずっと早く日本のものになったが、まだ鉄砲の音がしている間に文部省から役人が行って、学校を作って台湾の人たちを教育しはじめた。そして日本語も教えると同時に、一般の学問を全部に教えて知的水準を高めた。日本人は真面目人間というか、良心的というか、ずいぶん高いお金を使って学校とか病院を作って、台湾の人たちの知的水準を上げたわけだ。だから今、台湾に元からいる人は、

日本に対して親近感を持っていて、日本は台湾を虐待したなどと思っていない。むしろ戦後やってきた蔣介石が台湾人をいじめたので、非常に蔣介石には怨みを持っている。日本に怨みを持っていないのは何故かというと、日本は非常に文化水準を高めた。マラリアがあったのを全部なくしてしまうし、水道も電気も無かったところに、全部電気と水道を通し、分け隔てなく台湾人にも同じように福祉を与えている。日本の植民政策は近代的というか良心的であったと思う。ところが、英国はインドに対して決してそんなことはしなかった。

だんだん汚ない話になるが、たとえばボンベイという港町は一番西洋に近い都市で、インドで一番良い港であるから、一番近代化されている。東京ぐらいの高層建築が沢山あるし、ちょっと見たところでは大変な近代都市に見える。けれどもそこの道には交通信号はなく、キャデラックと馬車と荷車と、それからガタガタのタクシーと人間とがひしめき合っている。それで十字路を横切ろうとするのだから大変なものだ。しかもそこに牛がノソノソと歩いている。この牛というものが大問題なのだ。牛の前に、もっと汚ない話をすれば、ボンベイの銀座通りに当たる所を歩いていると、歩道に石のようなものが沢山落ちている。これは実は石ではなく、人間の排泄したものなのだ。

インドに行って私が驚いたのは、インドは不潔な国だということを聞いていたんだが、蠅も蚊もいない。蠅がいないのはどうしてか。蠅というものはウジから出てくる、ウジは汚ないものについているわけで、そのウジが汚ないものにつくためにはそこに水分が必要だ。ところがインドはあんまり暑いもんで、不潔なものがすぐ乾燥してカラカラになって石のようになってしまう。最近石ブームといって何でも石を集める人がいて世界中歩いてさかんに方々の石を集めている。インドでもって石を集めたらこれが石でなかった。しばらく経って気がついて捨てたという話が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com